
キス魔の義姉がやってきた！

みとみー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キス魔の義姉がやってきた！

【Nコード】

N99980

【作者名】

みとみー

【あらすじ】

主人公兼語り部の悠は、親の再婚で一人の義姉と共に暮らす事になる。でも彼女には『特定の対象に対して異様なまでに接吻を行いたい衝動に駆られる』という、いわゆる『キス魔』と呼ばれる特殊な性癖を持っていた！果たして悠は、理性を保ち続ける事ができるのだろうか！？

朝、スキあらばキスせよ

窓から日が差し込む。

俺はいつたい何時間眠る事ができたんだ…？

張り付いて離れない瞼を強引にこじ開けた。

ええ、朝ですね。

眠気さえなければ気分の良い朝なこと。

ふああ…。

「眠い…」

起き上がった拍子に首がこてん、前に倒れる。

……。

……。

これは、ダメかもしれないな…。

どうせ土曜日なのだ、寝てしまったところで困るのは俺だけだ。

ああ、こういう時重力はなんと良い奴なんだろう。

力を抜けば自然と体がベッドに吸い込まれていくではないか。

睡魔に敗北し、俺は覚悟を決めた。

……。

れつつ二度寝。

おやすみなさい。

そんなことを、壊れかけた歯車ほどしか回転していない脳で考えていたとき。

ゆっくりと、だが確実に。

重力に逆らい、何者かが俺の肩に手を回した。

「……」

寝ぼけている僕は驚く事を忘れている。

それは相手の顔を見たところで変化は無かった。

そう。

少し遊んでいるようにも見える茶髪に、非常に整った顔立ち。

恐らく、外見だけで判断するならば…。

家族をとて大切にしていそうな心の優しいお姉さん

それが俺の最初のイメージだった彼女は、嫌らしい笑みと共に俺の目の前に現われてくださりやがりました。

目の前ってかほんとに目と鼻の先。

二度寝失敗です。

というか…、近いです。

俺は睡魔と闘いながら舌足らずな口で言う。

「
ほとんど夢の中にいるような気分だったから何と言ったかは覚えていない。」

ただ彼女がこう言ったのは覚えている。

「ふふ……おはよ」

「ふあい、おふぁおうござい」

…ます。

………。

こゝこれは！

睡魔が、彼女に吸い取られていく！？

眠気が吹き飛び、重たかった瞼もこの瞬間だけは軽く感じた。硬直する体、緊張で動けません。

停止する思考、考えてる余裕なぞありません。

二度寝を妨害され、睡魔さえ倒される。

あぁ、なんて最低で傑作な朝なんだ。

………。

「ふゝ」

彼女が離れたところで、脳にいるハムスターが本気を出した。思考復帰、と同時に今の行動が何を意味するか理解。

「あ、あああああのえ？あのその…」

動揺する俺に彼女はまるで呆れたような顔をする。

「というか、呆れているんだろう。」

「いつまでそんな初々しい反応するつもりよー…キス程度なのにさあゝ」

「ま…まだ今日入れて三回しかされてないですよっ!？」

「仏の顔も三度までって言うでしょゝ？それと同じで初々しさも三度までって」

「言いませんよっ! あったとしても俺は絶対認めませんからっ!!」

彼女、嫌らしい笑み、再び。

「ああもっ…。うるさいなあゝ…」

バツと。

接触。

四回目。

思考シャットダウン!!

「はへへあくひへはんお」

彼女が俺と口をつけたまま何か言った。

唇がもぞもぞ動いた事に若干抵抗。

そしてすぐにそれ以上の驚きがやってきた。

「んゝっ!!!」

彼女の舌が俺の口で動き回る。

必死で追い返そうと、舌で押すが互いの唾液が混ざり合い結局絡める破目に…。

嫌ではないけど、気持ちが悪い。

よく分からない不自然。

感情が行き来する余裕などない。

思考など不可能だし、思考したところで何も変わりはない。

ただ、いいように弄ばれるだけ……。

……。

…。

「はあ……はあ……」

少し息の乱れた彼女。

後悔の嵐に苛まれた俺は毛布を頭から被って狸寝入り。

そつさ、これは夢だったのさ！きつと今は夢の中にいて、そろそろ目が覚めるころ。

無駄な現実逃避。

「今のは……四回目？それとも……一回目？ふふっ」

彼女、真に楽しそうである。

俺、真に苦しそうである。

まず痛感したのは、人は外見じゃ何一つ分からないということ。
世の中には色々な人がいるものだ。

特に彼女は異端だ。

もぞもぞ。

「ねえ……」

最初のイメージは本当にやさしい姉、だった。
顔を合わせて1分が経つまではそんなイメージだったのだ。
もぞもぞ。

ある意味、これは性癖と称することが出来るレベルにまで達していると
言っても過言ではない。

「ねえ……」

もぞもぞ。

がしっ

背後から腕を回され、さらに両足で俺をがっちりとホールド。

振り返ってはいけません。

何故なら……。

彼女は。

彼女は……。

「唇がそこにあるなら チューします」

嫌らしい笑みも、今では恐怖の対象だ。

彼女は、俺の姉は、キス魔なのだ。

一日目、挨拶は当然……！

話は義姉との出会いまで遡る。

幼い頃に親が離婚し、たった1人で俺を育ててくれた父さんが俺に再婚話を持ちかけてきた。

「ゾッコンラブだ」

離婚した母さんとは、大恋愛の末結婚という話を聞いていたのでそんなことを言われてもいまいち信憑性に欠ける。

聴いていくと、どうやらその相手方とは交際を始めてから2年になるそうだ。

思えば、その頃からスーツの着こなしが変わったような変わってないような……。

俺は試しに、そんな歳に不似合いな事を仰った父に反対してみた。だが青春時代に戻ったように目を輝かせ激論する父さんを見ているとその想いが俺にも伝わってきた。

……。

やはり親子というのは何かしらどこかで似てしまっただなあ〜なんて思った。

それにいつもと違っても真面目な姿が見られたのもあって、俺は承諾することにした。

父さんは喜びの舞さえ踊らなかったものの、気持ち悪いくらいに顔がにやけていた。

相手方と会うときはその顔しないでほしいと心から願った。

それから数日して、その相手方が我が家にやってきた。

昼食には遅いが、ティータイムには少し早い時間帯。

ドアをノックする音。

今までに類を見ないほどの速度で駆ける我が父親。

はっ…速い!?

「あ、えー、まっ…待ちくたびれたよ…!」

とても嬉しそうに、だけど緊張してうまく舌が回っていないようだった。

それを見てふふっ、と小さく微笑む女性。

お義母さん。

そう呼ぶにはちょっと抵抗が出てきたほど若く見える。というか若い。

「とりあえず立ち話もなんなんで、上がってください」

フイーバアア!している父さんの代わりに俺は”二人”をリビングへと招く。

父さんにくつついて歩く女性。

謎のオーラ。

今思えば”らぶらぶ オーラ”なのだろうが…そんなものを感じて壁に寄った。

彼らの周りに見えない壁が見えた。

「なかなか面白いお義父さんだね」

もう一人の女性。

彼女は不甲斐ない我が父の背を見ながらそう言った。

彼女は俺の目の前で立ち止まる。

「ん…。まあ接しやすいじゃないですかね? 良い意味で、お人好しですから」

でもシャイだね、と彼女は父さんを見て微笑む。

俺は苦笑い。

義姉。

家族をととても大切にしていそうな心の優しいお姉さん

そんなイメージの確立。

しかもお義母さんが美人なのを受け継いで当然この義姉も美人だった

た。

頼むからこのまま父の背を見ていていただきたい。

そんな希望はやむなく砕け、彼女はこちらを覗き込んだ。

「私の顔に何かついてる？」

っ…！

そりゃ…。

そりゃもうそんな顔されたら少しドギマギ（ちょっと古い気がする）
してしまうワケで…。

自分で言うのもアレだが…。

多分、見惚れてる。

…。

いやいや…、よき姉（多分良い人だろう）となる相手にときめいて
どうするんだ俺は…！

このままじゃヤバいと、義姉を視界から外そうと首を

…。

…。

「ねえ…」

嫌らしい笑み。

先ほどとは違う、何かに狙いをつけたかのような瞳。

油断したら吸い込まれてしまうんじゃないか？

しかも近い。

リアル・目と鼻の先状態。

体が硬直したように動けない。

ゴクッ

俺はツバを飲んだ。

義姉は手をゆっくりと俺の頬へともっていく。

さりげない恐怖。

ある意味での期待。

「あ……あの……なにを」

頬に添えられた手。

少しひんやりとしている。

「目、瞑って……」

「っ……!？」

何かを欲しているかのような表情。

の……飲み込まれる。

いつそのこと飲み込まれてしまおうか。

逆に何をされるか期待してたりもする……。

もう拒む理性も無さそうです。

俺はぎゅっ と目を瞑った。

ええいつ！煮るなり焼くなり”キス”するなり好きにしてくれっ！

……。

……。

……。

……。

むにん。

「いででで……」

頬が……頬が……。

「まったく……、スケベいな義弟を持った私は悲しいよ」

彼女は呆れたように首を横に振った。

はっ！まさか……罨!？」

な……なんて恐ろしいっ！

「えもしはへへひはおあ……。俺じゃ……ないじゃないですか」

「ふははっ、甘いな。義理とはいえ……姉の誘惑に負けたのが悪い！」

「……………」

反論のしようがない……。

というかよく何て言ったか分かったなあ。

確かに……。

悪いのは、俺……なのだろう……多分。

「は……」

よく分らない脱力感と謎の安心感。

何か一歩手前で踏みとどまった感じ。

壁にもたれ、目だけでリビングの方を見る。

「……………」

「……………」

お互いの話で盛り上がっている様だった。

アゲアゲだった父さんもどうやら落ち着きを取り戻したらしい。

「ほんとに……お似合いだと思わない？」

「そう……見えます。でも何であんな中年のおっさんを選んだのか……」

彼女は笑む。

「恋に年齢なんて関係ないのサ！」

「……………」

「何で黙るのさ」

「いえ、そういうの悪くないな……って」

ふ……ん

彼女はいきなり俺の手を握った。

「ここじゃ寒いし、キミの部屋まで連れてってよ」

「え、だったら荷物届いてるし自分の……………」

腕が強引に引っ張られる。

「いいから！」

これじゃどっちが連れて行かれてるのか分かったもんじゃない。ひとつため息。

そして俺は大人しく自室へ招く事にした。

彼女は部屋に入っただかと思うと、周りを見て啞然とした。

「何か気になります？」

きよとん。

「凄くある」

「例えば？」

彼女は手を大きく広げる。

「何もないとか、ダンボールが山積みになってるととか」
俺は笑ってみせた。

「ああ、そりゃ当然ですよ。ここ義姉さんの部屋ですから」
ギロツ

白い目が俺に突き刺さる。

さっきの仕返しのもりだ。

別に俺の部屋に連れて行ってもよかったんだけど、それは色々な意味で危ない。

結果的に義姉自身の部屋に連れてくることにしたのだ。

「寒くないし、手伝いもいるんだから一石二鳥じゃないですか」

明らかに不満そうに俺を凝視する、義姉。

俺とは異なっただ屈辱を味わうがいいっ！

今だけは悪役を気取ってみようと思う。

「ふふふっ……」

俺よりよっぽど悪役っぽくなっている、義姉。

そういえば先ほどからドアの近くに突っ立ったまま動こうとしない。

カチャッ

鍵。

「あゝさゝはゝか……」

彼女は膝を曲げ、跳躍体勢に入った。
何か必殺技の構えなのだろうか…。
身構える。

「……なりいいっ！…！」

蛙のように俺に向かって跳んでくる人間のようなもの。
反射的に俺は回避を試みる。

だが、彼女は決して飛んで攻撃することだけが目的ではなかったようだった。

片足を俺の首へ引っ掛ける。

そのまま勢いで俺ごと床に激突。

俺、クッションにより後頭部へのダメージなし。

義姉、背中から強打。

「つつ…捕まえた」

彼女は俺に足を引っ掛け、俺の首を軸にして回転。
人間業ではない。

そのおかげで俺は彼女のお腹をクッションにし、怪我をしなくて済んだのだ。

「大丈夫ですか…？」

そんな心配もつかの間。

彼女はつい先ほどのように俺の頬に手を添える。

手の向きが上下逆になっているので妙に不気味だった。

今度はどんなイタズラなんだろうか…。

「ねえ、キスしていい？」

誘惑。

だがそれが罠である事は既に見抜いている。

自信を持って言ってみせよう。

「出来るものならご自由に」

これで少しはぎゃふんと言わせる事ができただろう。

「じゃ、するよ?」

二度も同じ手が通用するものか。

「ほんとにしちゃうよ?」

俺だって成長しているのだ。

「聞いてる?」

なあに、目を開けてさえいれば下手な手に引つかかる事もあるまい。

「ねえ? いいの?」

一度理性が切れた分、今は十分余裕がある。

「しちゃうよ?」

冷静に考えれば、どうってことないのだ。

「おい」

これから姉弟となるのだ、こんなことで負けていてはいけない。

「ねえ!」

……!

いつの間にか彼女の顔が俺の目の前にある。

俺に覆いかぶさるように。

垂れた髪から良い香りがしていた。

「していいの?」

「でも俺は目、開けてますからね」

「うんっ…いいよ」

目を閉じた彼女に再びドキマガシそうになる。

だが大丈夫。

彼女の顔が近づいてくる。

だが奪われる事はあるまい。

「もっつ! 何で目つぶってくんないのさ!」

きつとそんな事を言うのだろう。

……。

接する距離が短くなっていく。

……。

どこまで焦らす気だ! そんなムキになっていたら本当に……。

だが、それで突き放せば、それこそチェリーボーイ…。
忍耐だ…

…。
…。
…。

彼女の唇は既に俺の鼻よりも唇に近い位置にあった。

だがやはり俺の読み通り…。

ピタリと、義姉の動きが止まった。

た…耐えた…。

ようやく…。

そう思った瞬間

「……………!？」

!!!!

……………!？

…。

…!？

シコウテイシ。

既に、彼女の唇は俺の唇と接していた。

しかも、離れようとしない。

くっついてしまったように。

きっと、何秒の出来事なのだろうけど。

今の俺には、何十秒と感じられた。

……………。

……。
……。
……。

「……………」

俺は姉を突き飛ばす。

単純に、息ができなくて苦しかった。

どうやら本当に何十秒の出来事だったようだ。

「さつきは、お母さんが見てたからできなかったんだけど、どうやらちゃんとキミは分かってたみたいだね」

「……………」

まだ整理ができずに混乱している俺に彼女は言う。

「気持ちよかったよ。キミとの……」キス”。　ねえ、もっかいしようよ……？」

……っ。

……これは。

これは……危機だ。

俺にとって、最悪最大にして最強の……危機だ……。

キス魔の義姉が……やって来てしまったのかも知れない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9998o/>

キス魔の義姉がやってきた！

2011年1月6日05時07分発行